

豆腐と三日月様

渡辺 恵子

私は父と合戦場行の汽車に乗り込んだ。
空席を探すと、ボックス席に六十絡みの、おじさんがカバンと風呂敷包みを向かい側の席に並べ、一人で新聞を読んでいる。

「ここにどなたか来られますか？」

と父は遠慮がちに尋ねた。

「いいえ誰もきませんよ。どうぞ、どうぞ」

と荷物を膝の上に載せニコツと笑った。

「じゃ、ご一緒させてください」

と会釈した父は、私を窓側の席に座らせた。

おじさんは新聞を懐にしまいながら、

「どこに行くの？」と言葉をかけた。

「合戦場まで行きます」と言う父に、

「こんな寒い日に子供連れで大変だね……」

と気の毒そうに私達を眺めた、このおじさんは、ごま塩の毬栗頭いけりあたまで日焼けした丸顔に、眉毛が垂れ下がり、うっとうしそうだ。そのうえ鼻の頭が赤く、笑うたびに鼻毛が出たり入ったりする。

私は可笑しさに耐えかね、窓越しに景色を眺めていた。家や畑や電柱までが後へ、後へと飛んで行く——乗物酔いに罹った私は、目を閉じ、二人の話を聞いていた。

「ところで合戦場には何しに行くんだえ？」

とおじさんはなれなれしく話しかける。

「三日月神社に、この子の『いぼ』を申し上げ（治癒祈願）に行くんです」

と問われるままに父は答えた。

「あの三日月様は靈験あらたかな神様だから、申し上げると御利益があるよ。それにしてもこんなに綺麗な肌をしてるのに、どこに『いぼ』が出来てるんだね？」

と興味深げに問い返した。

「いや、顔じゃないんですよ。左膝の裏側に粟粒大の『いぼ』が重なり合って出来、体操の時にブルマーになると、友達に『いぼ貧乏・いぼ貧乏』とからかわれ、あまりに不憫なので、申し上げに行くところです」

と父はありのままに話した。

「そりゃ、気の毒だね。だが三日月様に申し上げれば、必ず治るから大丈夫だよ！」
と自信ありげに私の肩を軽く叩き、一つ手前の駅でおじさんは降りて行った。

「合戦場あゝ 合戦場あゝ」
駅員の甲高い声が合戦場駅到着を告げた。
駅前には豆腐屋の看板が立っている。ここで豆腐を買うことに決めた父が、
「豆腐を一丁お願いします！」
と声をかけた。

「は〜い」という威勢のいい返事とともに、姉さん被りのおばさんが顔をだした。
「三日月様にお参りですか？お寒いのに御苦労さまですね」

と腕まくりして豆腐をすくい敷板（？）に載せて経木に包み、細縄で下げられるようにして父に渡した。

この豆腐は、三日月神社に病気『いぼ』『できもの』などの（）治癒を願うさいの、お供え物とされていた。

その三日月神社は、うっそうとした木立のなかに、ひっそりと佇んでいた。

社前には敷板に載せた豆腐が沢山供えられ、まるで白い布を敷き詰めたように見える。

父も用意してきた豆腐を、お供えして礼儀正しく拝礼した。私も父に倣い、

「どうぞ『いぼ』が早く治りますように」

と一心に祈った。

父は思い付いたように、私の『いぼ』のあたりをさすり、ふたたび神殿に手を合わせ、長いこと祈ってくれた。

そうして、父はほっとした顔で、

「三日月様に、重ね重ね申し上げたから、必ず聞き届けてくれるよ！」

と力強く言った。私は父のその言葉を素直に受け入れた。

この時、初めて神前にお供えされた豆腐の数だけ、私のように悩み、そして心配する家族達がいることに気付いた。

陽が傾き、日光風おろしが吹きすさぶ。私達は肩をすぼめ足早に駅へ急いだ。

『甘酒』の看板が北風に揺れている。父が甘酒を買ってくれた。店先で甘酒を飲んだり、鼻水をすすり上げたりで忙しいが、この甘酒は凍えた身に泌みわたり美味しい。

ふと、通りを見ると、例の豆腐屋のおばさんが、「豆腐と敷板を自転車に積んで、神社から走って来るのが見えた——」

父も私も唾然として見送った。

「あれは私達がお供えした豆腐じゃないの!？」と父の顔を見た。「世間には子供の知らないことが沢山あるんだよ」と父は苦笑いして、甘酒を飲み干し……「寒いから早く帰ろう」と、ラクダ色の襟巻をはずし「真知子巻」のように巻いてくれた。ふわあゝと父の温もりが伝わり、タバコの匂いが微かにした。

豆腐と三日月様は、九歳の私に、父との忘れ難い旅の思い出も、お授け下さった。